M. エンデの『はてしない物語』に見られる振動医学的効果について

梅　内　幸　信

はじめに

現代においてあらゆる組織が細分化・専門化されているゆえに，社会全体は一種迷宮のような観を呈している。多くの人々は文明の恩恵に浴しているが，しかし，文明の利器によって構築された社会は，いったん破局が訪れると，一挙に瓦解する危険性を内包している。こういった状況の中で，しばし大宇宙の中の人間存在に思いを馳せると，私たちは，もう１つ別の思考様式もあることに気づく。それは，部分を全体との関連において把握するというホリスティックな存在論である。つまり，時計の小さな歯車であれ，それが１つでも動かなくなれば，時計全体の機能は停止してしまう。それと同様，地球における一個人が正常に機能しなくなれば，地球も正常に機能しなくなり，地球が正常に機能しなくなれば，太陽系，銀河系，ひいては宇宙全体が正常に機能しなくなるというホリティックな思考様式が提示されうるであろう。

人間の１個の細胞からクローン人間が創られうる時代にあって，私たちがミクロの世界のみを注視するのではなく，やはりマクロの世界との相補関係において人間存在を把握してゆかねばならない。ミクロの世界とマクロの世界を相補的に統合する学問とは，文学，歴史，美術，音楽，医学，法律などを包括する総合的フィロソフィアの創設を意味している。この研究を，その一端としたい。

１．ペテン師と時代の先導者

安定した社会において，とかく異質なものは敬遠され，警戒され，ときとして激しい抵抗を受けがちなものである。古くは，旧来の天動説に対抗して地動説を唱え，異端審問にかけられたガリレオ（Galileo Galilei, 1564-1642）

の事例がある。また，動物磁気を提唱したメスマー（Franz Anton Mesmer, 1734-1815）は，一時盛大な歓迎を受けたこともあるが，その理論はひどい誤解を蒙った。天然痘の予防法を発見し，人類の生存に多大の貢献をなしたジェンナー（Edward Jenner, 1749-1823）の接種も，当時の医学界からなかなか認知してもらえなかった。そして今日，200 年ほど前にドイツのハーネマン（Samuel Hahnemann, 1755-1843）が提唱したホメオパシー療法は，ヨーロッパではある程度認知されているとはいっても，日本の医学界においては一部でしか認められていない。

筆者は，長い人類の歴史において，この種の新奇な学説を提唱し，その時代の教養人ないし学者たちから不審の眼差しで見られてきた人々に大きな関心を抱いてきた。彼ら以外にも，例えばカリオストロ（Alessandro di Cagliostro, 1743-95）やザッハー＝マゾッホ（Leopold Ritter von Sacher Masoch, 1836-95）等にも興味をもったが，端的に言って，前者は詐欺師で後者は性的倒錯者であるゆえに，やがては筆者の追究意欲も薄れていった。しかしながら，その延長線上に大きくその偉大な姿を浮上させたのは，精神分析を提唱するフロイト（Sigmund Freud, 1856-1939）であった。続いてその姿を浮上させたのは，このフロイトの後継者と目され，元型理論を打ち立てたユング（Carl Gustav Jung, 1875-1961）であった。ところが両者は，やがてフロイトの理論の根本概念であるリビドーを巡って反目し合い，最終的には決別することとなった。

フロイトとユングの理論は，ともに人類の精神文化に大きな影響を与えたものであるゆえに，それらを簡潔に要約するのでさえ難儀な仕事である。ただし，両者の特徴を簡潔に述べれば，フロイトの理論は，ややペシミスティックではあるが，カミソリのような切れ味をもっている。これに反して，ユングの理論は，どちらかと言えばオプティミスティックではあるが，鉈のように大胆な切れ味をもっている。両者の理論は，それぞれの用途に応じて使用されるべきものであるゆえに，優劣をつける筋合いのものではない。筆者としては，精神分析理論の童話解釈との関連における重要な視点は，フロイト

がその「W･イェンゼンの小説『グラディーヴァ』にみられる妄想と夢」(1909年）という論文において指摘する次のテーゼであると考える。

〈ブロイアーが浄化的 kathartisch と名づけ，筆者が好んで「精神分析的」psychoanalytisch と呼んでいるこの治療法の根本は，無意識的なものの抑圧が病因でハーノルトの妄想と同じような障害にかかっている患者の当の無意識的なものを，ある程度無理に意識に昇らせるという点にあり，これはグラディーヴァが，幼児の自分たち関係についてハーノルトの内部で抑圧されている記憶にたいして行なった方法と完全に一致している。〉[1]

神経症患者の場合，「心的障害がその源泉に引きもどされれば，それと併行してその障害は消滅する，すなわち分析が同時にまた治癒の役目を果たすのである」(84ページ）という考えは，極めて重要なものである。この神経症患者に関する治癒の手法の根本は，一見意外な印象を与えるかも知れないが，メスマーまで遡ることになる。[2] 当時，ペテン師か魔術師として見なされがちであったメスマーが，その実証と理論化に程遠かったにせよ，啓蒙主義の時代にすでにフロイトにまで続く催眠効果を発見していたのであった。メスマーによって一躍世界的脚光を浴びることとなった力動精神医学の思想は，その後ピュイセギュール侯爵 (Marquis de Puységur, Armand-Marie-Jacques de Chastenet, 1751-1825) やナンシー学派のリエボー (Auguste Ambroise Liébeault, 1823-1904) とベルネーム（Hippolyte Bernheim, 1837-1919)，そしてサルペトリエール学派のシャルコー (Jean-Martin Charcot, 1825-1893) 等を経て，フロイトやユングへと受け継がれてゆくことになる。[3] このように，

---

[1] 拙著『童話を読み解く』同学社，1999年，84ページ。
[2] ブラネリ，ヴィンセント『ウィーンから来た魔術師』井村宏次・中村薫子訳，春秋社，1992年，307-326ページ参照。
[3] エレンベルガー，アンリ『無意識の発見　上・下』木村敏・中井久夫監訳，弘文堂，1980年，上61-118ページ参照。

人格の分裂や多重人格の症例が公に報告されるようになるのは，18 世紀後半頃からであり，それ以降症例報告の数は徐々に増えてくるのである。

２．メスマーとフロイトの手法

フロイトが明確に理論化した治癒の手法に関して言えば，基本的にはすでにメスマーにあってその原型は把握されていたと考えることができる。それを裏付けるものは，ウィーンで有名な商人，オイゲン・コルシツキーの失明を治した症例である。オイゲンは，ウィーン一の菓子製造者であった。彼は，貴族にもブルジョワにも大事にされる善良な人物であったので，フリーメーソンの「真実と団結」支部長ラルグス・フォン・パルアーに入会を勧められても，これを断りはしなかった。周知のように，フリーメーソンの入会に当たっては，火と水と風による「三つの試練」が課せられる。人の善いオイゲンは，なんら心の準備をしていなかったと思われる。そのため彼は，この試練の直後，失明するのである。その経過は，次のように描写されている。

> オイゲンはわなわな震え出した。にわかに息がつまり，水に溺れ，火に焼かれる悪夢に襲われたのだ。分厚い目隠しに締めつけられた頭に激痛が走る。布をずらそうともがくと瞼はさらに締めつけられて，圧迫された眼の中に閃光が走った。試練のしょっぱなから肝をつぶし，血も凍りつくような恐怖に身動きもできなかった。彼は生きた心地もなく汗を滲ませ震えていたが，このぼろ布同然になった男を三人の同志はなおも「三つの試練」に引きずり回し，無理やり《苦難》に耐えさせるのだ。試練はすべて死のような静寂の中で行われ，オイゲンも文字通り生きた心地がしなかった。最後にやっと「栄誉の間」に連れていかれたが，足の力が抜けて入会の誓いをたてようにも体を支えきれない。その上暗記した言葉も忘れてしまっていて，まわりから囁いたり，代唱してやらねばならなかった。それもすむと，ラルグス・フォン・パルアー支部長を囲む同士（ママ）全員がいっせいに剣を抜き，切っ先をオイゲンの額に突きつけた。

〔……〕オイゲンは眼が眩み，手で眼を覆いながらどうと倒れ込んだ。熾烈な儀式に新参者が失神してしまうのはよくあることなので，誰もうろたえはしない。ソファーの上に寝かせて，気つけ薬を飲ませ，そのあいだ同志たちは音楽を奏で彼の入会を祝った。ところがオイゲンはいつまでも暗然たる面持ちで押し黙っている。やがて，虚ろな目で部屋を見回しながら彼は明りを求めた。立ち上がろうとしたものの，またへたり込んでしまうので，みなが心配しはじめた。彼は相変わらず明かりをくれという。やっと誰もが理解した。オイゲンの眼は見えなくなってしまったのだ。[4]

オイゲンの失明は，明らかに器質的なものではなく，「三つの試練」による心因性のショックからくるものである。彼の失明を治すために，眼科の専門医であり，白内障の外科手術もできるバルト教授が治療に当たる。しかし，教授の処方する「カミツレ薬草風呂入浴」や「タチアオイ薬草風呂入浴」は効を奏しなかった。オイゲンを失明させた張本人のラルグス・フォン・パルアー支部長は，悩んだ末に，フリーメーソンの「善行」支部長ツィトルス･ヤーヌス・フォン・エレンベルクに相談し，最終的には医者としての評判が高いメスマーにオイゲンの治療を頼んだのであった。メスマーの治療は，基本的にはフロイトの手法と同種のもので，病を引き起こしたその原点（トラウマ）に遡るというものである。この経緯を『眠りの魔術師メスマー』の著者であるチュイリエは，次のように要約している。

オイゲンの治癒は，ゾボティッシュのユダヤ人青年の場合に劣らず，メスマーに自分の治療法の効力をいやが上にも思い知らすことになった。患者への質問を通じて，患者自身に障害の発生経緯を再構成させると，当人はその経緯を話しながら不安や発作を再体験することになるの

[4] チュイリエ，ジャン『眠りの魔術師メスマー』高橋純･高橋百代訳，工作舎，1992 年，162-163 ページ。以下，この文献からの引用は，「チュイリエ」と略記し，本文引用末尾にページ数を付す。

だが，この再体験された発作が治癒のきっかけとなるのだった。〔傍点は筆者〕この二症例からメスマーは次のことも確かめた。通手によって伝えられたメスマーの流体は相手の心身に浸透するが，その際催眠術がかけてあれば，その催眠状態を長引かせたり打ち切ったりして，相手の患者を自分の意志通りに操ることができるのだ。

このように患者の精神に作用を及ぼすことによってメスマーは患者を治していたわけだが，彼はこの作用を動物磁気療法という名のもとに具体化することに固執した。自分の持つ力に超自然力とか天啓とかを持ち込みたくはなかったからだ。自分の医学は，今みずからが規範を打ち立てようとしている動物磁気療法においてこそ晴れて真の医学たりうるのだ。（チュイリエ 170 ページ）

フロイトから遡ること 150 年ほども前の 1760 年代において，すでにメスマーが精神分析の手法を発見していたという事実は，驚くべきものである。[5] この手順は，フロイトの精神分析療法における手順と似ている。筆者は，拙著『悪魔の霊液』において，C.H. セグペンと H.M. クレックレーの『私という他人』におけるイヴ・ホワイトの症例を詳細に分析し，彼女が人格の分裂を体験したが，幸いにも最終的には人格の統合を成し遂げたその経過を，次のように要約した。

『私という他人』において，ブラック消滅の最大の原因は，原初の人格であると思われるジェーンが，ホワイトの記憶ばかりではなく，ブラッ

[5] ダーントン, ロバート『パリのメスマー——大革命と動物磁気催眠術——』稲生永訳, 平凡社, 1987 年。この原著は 1968 年に出版されているが，ここでダーントンは，通常「ペテン師ないし魔術師」としてのみ, 否定的に評価されがちなメスマーを公平に評価しようと努めている。「本研究はメスマーを正当な地位, つまり, この時代にもっとも話題をよんだ人間の万神殿（パンテオン）において, チュルゴー, フランクリン, カッリオストロに近いどこかに復帰させることになろう。」（4 ページ）他方, 1978 年にその原著が出版されているタタールは，ハーヴァード大学のドイツ文学研究者であるが, メスマーを旧態依然として「ペテン師」として把握している。（タタール，マリア・M・『魔の眼に魅されて』鈴木晶訳，国書刊行会，1994 年，7-70 ページ参照。）

クの記憶をも学習を通じて吸収していったという事実である。そして，記憶の支配を始めたこのジェーンがまもなく突き当たった心の傷は，5歳の時，祖父の葬式に際して，母親が死者の顔に手を触れなければならないと厳命した時に体験した死の恐怖であった。さらに，この恐怖体験を経由して，4歳の時の恐怖体験，即ち大きな掘割の汚い水の中で酔っ払いが溺死した事件に辿り着く。こうした幼児期の隠された記憶を取り戻すことによってホワイトは，心の傷の本来の原因が，父親との接触の欠如と，無意識の抑圧によって生じた双生児の妹に対する嫉妬にあることに思い当たる。この最も古い心の傷の原因を理解して初めて，その傷は癒され，これと同時にホワイトとブラックを分け隔てていた閉塞物が融解されて，再び心的エネルギーが正常に循環し始めるのである。こうして最終的には，安定的統合人格であるエヴリンが出現したのであった。[6]

ここにおいて「心的障害」を「感情のしこり（ブロッケード）」と把握し,「心的障害をその源泉に引き戻す」ことを「波動調整」（ハーモナイズ）と把握すれば，まさしくこの着想は，現代ドイツで提唱されている「振動医学」の考えと呼応するのである。

3．振動医学

日本においてドイツの振動医学を紹介しているのはドイツ人ヴィンフリート・ジモンであり，また彼の友人野呂瀬民知雄である。野呂瀬は，その著書『ドイツ振動医学が生んだ新しい波動健康法』において，「西洋医学が長らく見落としてきたもの，つまり人間の自然治癒力を最も確実に引き出す方法を，私たちはようやく手に入れたのです。それが，振動医学のバイオレゾナンス・メソッドです」[7] と述べている。また，ジモンは，その著書『最新ドイツ波

---

[6] 拙著『悪魔の霊液――文学に見られる自己の分裂と統合――』同学社, 1997 年, 229-230 ページ。以下，この文献からの引用は，「悪魔の霊液」と略記し，本文引用末尾にページ数を付す。

[7] 野呂瀬民知雄『ドイツ振動医学が生んだ新しい波動健康法』現代書林，2003 年，15 ページ。以下，この文献からの引用は，「野呂瀬」と略記し，本文引用末尾にページ数を付す。

動健康法』において，「振動医学で可能なこと」[8] として，次の 4 点を列挙している。

①エネルジェティックなブロッケードの有無を調べること
②そのブロッケードを解消すること
③ブロッケードをつくった原因を明らかにし，原因を除去すること
④生命エネルギーの流れをより健全なものにすること（ジモン 140 ページ）

エネルジェティックなブロッケードを波動調整することによって健康な状態が回復されるという事実を踏まえると，次のようにイヴ・ホワイトとイヴ・ブラックとでは脳波の違いが見られたという結果は，振動医学における波動調整の信憑性を示唆するものと考えられる。

第三の人格であるジェーンは二人のイヴの中間物のような存在であるとはいえ，浅薄で不完全という印象が強いブラックとも，また，情感のたくましさが欠如しているホワイトとも異質な人格をもち，この意味においては三人の中で最も強い生命力と現実適応能力を感じさせる。当初ジェーンは，二人のイヴの知識と記憶に直接近づくことはできなかった。しかし，その後二人のイヴが記憶を想起する度に，これを自分のものとして習得することができたのである。しかも，ジェーンにはブラックが考えている内容も分かり，加えてそのことをブラックに気づかれずにいることさえできたのである。このジェーンの存在は，ブラックにとっては大いなる脅威とならざるをえなかった。ただし，ジェーンはホワイトからしか出現することができなかった。このことは，ジェーンが意識

[8] ジモン，ヴィンフリート『最新ドイツ波動健康法』現代書林，2003 年，140 ページ。以下，この文献からの引用は，「ジモン」と略記し，本文引用末尾にページ数を付す。/ Vgl. Schmidt, Paul: Symphonie der Lebenskräfte. RAYONEX Wellentechnik GmbH, Lennestadt(Saalhausen) 1986.

のレベルにおいてホワイトの方に近いということを裏付けるものであろう。これを証明するかのように，脳波記録機によって心身の平静を示すアルファ波を測定すると，ホワイトとジェーンが同じ毎秒 10½ サイクルを示すのに反して，ブラックは正常の上限である 12½ サイクルを示したのである。(悪魔の霊液 212 ページ)

つまり，病んだ人格に健全な人格のもつ波動を与えてハーモナイズすれば，健全な人間に復帰する可能性が想定されるのである。振動医学を提唱したパウル・シュミットは，「肉体（ボディ）よりも，エネルギーボディのほうが先に病む」(ジモン 72 ページ）というテーゼを提出している。このテーゼは，人間の心ないし心的エネルギー，ひいては生命力に照明を当てた精神分析の手法と共通点をもっている。この関連において，次のような「ウロボロス」というシンボルは，深層心理学において重要な意味をもっている。

ところで，ホワイトの中で心の閉塞物が融解される時期は，ホワイトが赤いコールテンのジャンパーを着ていた幼児期の記憶を回復する時期に当たっている。興味深いことに，この記憶回復の時期に際し，ジェーンが数度に亙って，自分が蛇に変わる夢を見ている。この変身の夢は，深層心理学的ないし象徴学的立場から見て，非常に示唆に富む出来事と言わざるをえない。というのも，深層心理学的に見れば，蛇は無意識のエネルギーを表し，また蛇は，「脱皮をするところから，死と再生にかかわる象徴であり」，さらに，「自分の尾をのみこみながら永遠に円を描き続けている尾をくわえた蛇は，ウロボロスとよばれて，永遠の時間と原初の混沌をあらわすもの」と解釈されるからである。同様に，象徴学的に見ても，蛇は原初の宇宙の力・無意識・生命力・治癒力・再生を意味しているからである。(悪魔の霊液 217 ページ)

このように，動物磁気と精神分析学，振動医学は，不可思議にもその核心

において共通点を有し，1つの合流点を形成している。しかも，そこにはさらにホメオパシー療法の考えも流入しているのである。万物の存在の最も本質的な基盤が振動であるという振動医学の根本思想と「水の記憶（波動ないし磁場）」に基づくホメオパシー療法には，確かな共通点が見いだされる。

4．文学におけるホメオパシー的効果

文学の効用を問うとき，筆者個人は，ホラティウスの詩論に倣って，「教化と娯楽」（prodesse et delectare）と答えざるをえない。ただし，ここにおける教化は，「不安を克服する智恵」を含めて理解されなければならない。まさしく不安は，キルケゴールが言うように，「死に至る病」である。この病こそ，人間の存在を深く蝕むものである。従って，この病を人間は，なんとかして治さなければならない。

病を治すと言うとき，医学の分野においては，逆療法と同種療法がある。現在では逆療法が主流となっているが，2500年前のギリシア時代において，医学の祖ヒポクラテスは，当時においてすでに，人間の「自然治癒力」を強調することによって，同種療法の根本を認識していた。[9]

ヴィンフリート・ジモンは，『最新ドイツ波動健康法』の中で，振動医学との関連で，これと類似するホメオパシーの原理を，次のように指摘している。

> 日本では「ホメオパシー」という名称が，そのまま使われていますが，敢えて日本語に翻訳すると，「同種療法」あるいは「同毒療法」となるそうです。
>
> なぜ「同毒療法」と訳されるかというと，薄められた毒は，人間の自然治癒力を高めるとともに，その毒が健康な人に与えられた場合に引き起こす症状を軽減したり，治したりする。この原理がホメオパシーの基本だからです。（ジモン58ページ）

---

[9] 常石敬一『ヒポクラテスの西洋医学序説』小学館，1996年，28-51ページ参照。

古来より，「毒をもって毒を制する」という諺もある。ヒポクラテスの後，今から200年ほど前に，ホメオパシーの祖サミュエル・ハーネマン（1755-1843）がこの同種療法を再発見し，実際に用いた治療を行なった。彼のテーゼ「同種は，同種によって治される」[Similia similibus curantur] は，ホメオパシーのスローガンともなっている。[10] 現在，この治療法は改善され，レメディを用いて治療が行なわれる。レメディは，マザーチンキを1滴取り，99倍の溶液（蒸留水＋アルコール）に入れ，44回振盪する。これで，100倍の希釈となるが，これを10回，20回と繰り返す。最後には，原物質がほとんど無くなるまで，何万倍，何十万倍に希釈・振盪され，薄められる。しかし，原物質のポテンシー（原物質のリズムないし磁力）は，不思議なことに逆に強化されるのである。[11]

この事実を踏まえると，レメディにあって原物質は，ほとんど意味をもたないと考えられる。むしろ，原物質のもつ「振動ないし波動」が水に転写されるのだと解釈せざるをえない。フランスの科学者ジャック・ベンベニスト（Jacques Benveniste, 1935-2004）博士は，イギリス科学誌『ネイチャー』に「高希釈液の活性」に関する論文を掲載したが，遺憾ながら，それによる彼への攻撃は，彼の言葉によると「魔女狩り以上のもので，およそ科学者とは無縁の態度であった」と言われる。[12] ベンベニスト博士は，フランスにおいて財政的支援を受けられず，不遇な晩年を迎えた。筆者が，「グリム童話における文化的変位の研究」において，フランスに関して「論理的・アポロン的」，ドイツに関して「観念的＝ディオニュソス的」という図式を提出したが，[13]「論理的・アポロン的」も，度が過ぎれば，「文きり型，

---

[10] グンペルト，マルチン『ハーネマン』由井寅子監修，熊坂春樹訳，ホメオパシー出版，2006年，180-198ページ参照。
[11] 由井寅子『ホメオパシー　in Japan』ホメオパシー出版，2006年，24-26ページ参照。
[12] ベンベニスト，ジャック『真実の告白　水の記憶事件』フランソワ・コート編，由井寅子：日本語版監修，堀一美・小幡すぎ子共訳，ホメオパシー出版，2006年，4ページ。
[13] 拙論「『イバラ姫』（KHM50）に見られる文化的変位について」，鹿児島大学法文学部紀要『人文学科論集』第68号，2008年参照。

杓子定規的」になる危険性があると断り書きを付さざるをえない。

「水の記憶」という不可思議な現象も，しかしながら，現在では野呂瀬が，次のように「ルルドの泉」を「波動水」によって説明しているように，以前ほど謎めいた現象ではなくなっている。

> フランスの「ルルドの泉」は，その水を飲んだり，そこに身体の悪いところを浸すと，目の見えなかった人が見えるようになったり，足の不自由な人が歩けるようになるなど，さまざまな奇跡を起こしてきました。
>
> この水の成分分析を行っても，特別なものは何も含まれていません。特別な成分が見つからないのも当然で，これはルルドの泉が発している波動によるものだと，今日では考えられています。
>
> まだ解明されたわけではないので，はっきりしたことはいえませんが，地下から湧いてくる間に，近くにある水晶などの鉱石の波動を受け，身体によい影響をおよぼすプラス波動を帯びるようになるというのがエネルジェティックな解釈です。
>
> このような水のことを「波動水」といいます。むろんすべての水は，そこに含まれる成分に応じて，それぞれ固有の波動（振動）を持っていますが，とくに健康維持に役立つなど，プラスの影響をもたらすものを波動水と呼んでいます。
>
> レヨメータの波動調整によって，普通の水を波動水に変えることができます。たとえばメインチャクラを活性化する 7 つの周波数を水に転写すれば，“チャクラ活性化波動水”ができ上がります。（野呂瀬 164-165 ページ）

ホメオパシーの根本原理は，この波動を閉じ込めたレメディ（丸薬ないし液体）を摂取することによって，摂取者のバイタルフォースに信号を送り，「あなたは，今病気（マラリア，結核，ガン，鬱，怒り，嫉妬など）ですよ，ということを気づかせ，これらの病に対抗する自然治癒力を活性化し，生命力

を増進させるものである。水にこのような機能が果たして本当にあるのかどうか，疑問に思う人もいるかも知れない。しかし，水には人間の感情を記憶する性質があることを示す事例は存在している。『パウル・シュミット式バイオレゾナンス』を著したディートマー・ハイメスによると，「あなたは不細工だ。気分が悪くなる」と話しかけられた水は，凍らせると歪んで不規則な結晶を形成するが，これに反して，「愛しているよ。君はきれいだ」と話しかけられた水は，凍らせると美しく規則的な結晶を形成すると言われる。[14]

リズム，あるいは波動（振動）は，自然界ないし宇宙を支配している。野呂瀬にせよ，またジモンにせよ，彼らの振動医学の根本原理は，量子物理学の基礎を築き，ノーベル物理学賞を受賞したドイツの物理学者マックス・プランク（Max Karl Ernst Ludwig Planck, 1858-1947）のテーゼ「すべては振動であり，その影響である。現実には何の物質も存在しない。すべてのものは，振動から構成されている」に基づいている。（ジモン 51 ページ）このテーゼの核心は，仏教の『般若心経』で説かれる「色即是空，空即是色」の教えにも通底している。つまり，明確に現象として表れるものと空と見えるものは，その振動数の違いによるものでしかない。換言すれば，密度の高いものは現象として把握され，密度の低いものは空のように見えるが，しかし，いずれの場合にも振動は現在しているのである。

同じ関連において，逆療法と同種療法は対立した療法ではあるが，しかし，これら 2 つの療法は，排他的な関係にあるわけではない。それらは，お互いがそれぞれの得意な分野でその独自性を発揮する相補的な関係にある。その両極の間に生ずる緊張関係，協力関係が重要であると言わねばならない。医学の分野ばかりではなく，芸術の分野においても，それどころかあらゆる分野において，対立原理が働いている。例えば，現実と非現実，鏡の表と裏，実数と虚数，プラスとマイナス，男と女，といった対立原理の緊張関係から森羅万象が生ずるのである。ちょうど，文法の分野において直説法が現実の

[14] Vgl. Heimes, Dietmar: Bioresonanz nach Paul Schmidt. Spurbuchverlag, Baunach 2006, S.95.

世界を表現し，接続法が非現実の世界を表現するように，文学の分野においても，外界と内界を表現する方法がなければならない。この意味において，ファンタジー文学とは，外界と内界を調和的に統合しようとする文学であると言える。従って，ファンタジー文学は，基本的には50％の現実と50％の非現実を含んだ文学形態であると見なすことができる。端的に言うと，「虚構という枠組みの中で，現実の内容（事実・出来事）と非現実の内容（神話・童話）を，半々に混入させた文学」と定義づけることができる。[15]

人間存在は，生と死との戦いであるゆえに，そこには存在を危うくする様々な要因が生じる。まずは，不安と病である。現存在にかかわる不安を克服するためには，不安を希望や理想の力によって抑制するか，あるいは不安に対してより純粋な不安でもってシグナルを発し，人間存在の不安に対するバイタルフォースを喚起することによって，不安を克服する潜在力を強めるしかない。方法は，この2つしかないのである。前者は，医学の分野において逆療法，後者は同種療法（ホメオパシー）に相応している。このことは，同様に病に関しても当てはまる。

ファンタジー文学，少なくとも M. エンデのファンタジー文学には，振動医学ないしホメオパシー効果が見出される。ここではとりあえず，『はてしない物語』を考察の対象としたい。

5．『はてしない物語』における振動医学的効果

『はてしない物語』は，1979年秋に出版されるやいなや，空前のベストセラーとなり，「ドイツ語の本で戦後最大の成功を収めた」と言われる。[16] この作品には彼の思想の結晶が閉じ込められているが，それはファンタジーのもつ力に他ならない。

『はてしない物語』[17] における主人公バスチアン・バルタザール・ブックス

---

[15] 拙論〈「ファンタジー文学」に関する定義づけの試み〉，『藝文研究』（柴田陽弘教授退任記念論文集），第91号第2分冊（91-2），2006年，71-84ページ参照。

[16] 樋口純明（編）『ミヒャエル・エンデ――ファンタジー神話と現代――』人智学出版社，1986年，67ページ。

は，10 歳か 11 歳くらいの背が低く，「でぶでＸ脚」(S.94) であるため，風采の上がらない少年である。そのうえ，スポーツも勉強も苦手で，気弱なため，学校ではからかわれたり，いじめられたりするので，彼にとって学校生活は，「はてしなく長い囚われの刑」(S.13) としか思われない。それと同時に，彼にとって人生そのものが面白みがなく，灰色の人生となってしまっている。灰色の冷たいある 11 月の朝，いじめっ子に追われて本屋に逃げ込んだバスチアンは，赤がねいろの表紙の『はてしない物語』という本に引き付けられ，それを盗みだし，学校の物置に隠れてその本を読み始める。こうして，バスチアンは，ファンタージエン国に入り，そこで数々の冒険を体験し，そこでの試練を乗り越えて，現実に帰ってくるのである。

ファンタージエン国では，彼が自分の欲望を実現するたびに，1 つずつ記憶が失われていった。彼のすべての記憶が失われたならば，彼は現実に帰ることができなくなるのである。残った数少ない記憶を頼りに「霧の海」を渡り，あるがままの自分として愛されたいと願い，そして，「変わる家」でアイウォーラおばさまに大事にされ，自分も「愛せるようになりたい」(S.393-394) と思うようになる。ようようヨルのミンロウド鉱で，透明な氷のかたまりに閉じこめられた淋しい父親の絵を見いだす。この父親の絵が，バスチアンの過去の記憶の再構成[18] において重要な役割を果たすのである。そうして，ついにバスチアンは，アトレーユたちの助けを借りて，生命の泉にたどり着き，ファンタージエン国で得たすべてのものを返して現実界に戻る。このようにバスチアンは，ファンタージエン国で経験する様々な冒険を通じて彼自身の欠点や弱点を克服し，内面的な成長を遂げることができるのである。この冒険によって今やバスチアンは，人格の変成を成し遂げている。外見は，たいして変わらないが，しかし，彼は自分の存在の一回性を認識し，未来への希望に満たされている。彼は，決して虚無に捕われることはない。

---

[17] エンデ，ミヒャエル『はてしない物語』上田真而子・佐藤真理子訳，岩波書店，1983 年。／ Ende, Michael: Die unendliche Geschichte. K. Thienemanns Verlag, Stuttgart 1979. 以下，この原文からの引用は，本文引用末尾にページ数を付す。

[18] 拙著『悪魔の霊液――文学に見られる自己の分裂と統合――』同学社，1997 年，211-222 ページ参照。

主人公バスチアンは，幼いときに亡くした母親からの愛情飢餓によるコンプレックス及び虚栄と戦っている。現存在の不安は，ここでは「虚無」と言い換えられている。劣等コンプレックスに捕われているバスチアンは，ファンタージエン国に入り，願望を叶えることのできるお守りアウリンを手に入れると，現実とは逆の，風采の良い，英雄のようで，人に恐れられるような人間になろうとする。しかし，その願望は，「真の望み」ではなく，欲望であったゆえに，欲望が叶えられるたびに，自分の記憶が失われてゆくのである。

バスチアンが逃避するファンタージエン国は，現実とは正反対の世界である。しかし，読書行為を通じて主人公は，本の中にある虚構の世界，すなわちファンタジーの世界を心の中の真実として取り入れてゆく。[19]　つまり，物語に惹きつけられ感情移入が起こったとしても，それはエンデの目指す最終段階ではないのである。外界に存在する本の中に閉じ込められているファンタジーの世界を，自分の心の中に取り入れ，さらにはこれを認識として結晶化させ，自分の行動様式を創成し，これに基づいて自分のファンタジーを外界において実現しなければならない。この意味において，本の中のファンタジーの世界を，読書行為を通じて自分の心の中に取り入れる「場面の接続」は注目に値する。物語では赤文字によって描写されている場面，つまりバスチアンのいる現実世界を描く場面は 53，緑文字によって描写されている場面，すなわちファンタジー世界を描く場面は 52 ある。従って，その接続は 104 に上る。前述したように，一文の中に赤文字と緑文字が合わさっている場合もあれば，それぞれの独立した文のまとまりが交錯する場合もある。1 つ 1 つの接続を分析していく過程で，接続には無機的接続と有機的接続の 2 つがあることが分かる。

物語の前半においては，2 つの世界が分離し，完全に異質の世界として無

---

[19] 小林良孝「ミヒャエル・エンデ著『はてしない物語』におけるはてしなさについて」静岡大学人文学部人文学科研究報告『人文論集』第 54 号，2003 年，209 ページ参照。「エンデが自分の基本的創作法として『外界を内界に換えて描く』という時，彼が意図していたのは，おそらくはこういう意味においてではない。エンデが本当に意図していたことは，本の読み手であるバスチアン自身が彼が読んでいる『はてしない物語』の中の登場人物としてその物語に入って行くということなのだ。」

機的に描写される「無機的接続」が多く見られる。例えば，ハウレの森の場面である（92ページ参照）。いやいや現実世界に引き戻されたバスチアンは，ここで現実世界の状況把握を強いられる。これに反し，ファンタージエン国の存亡をも左右する「女王の死」は，自分の人生を大きく変えることとなった「母親の死」に対応している。このように物語中の出来事つまり内界の事象が，バスチアンに外界である現実世界を思い出させるきっかけとなっている。このような接続については，視覚的には赤文字と緑文字ではっきりと2つの世界が区別できるが，2つの世界で起こるそれぞれの出来事に共通性があり比較的自然な場面接続がされているので，有機的接続であると言える。ある意味において，無機的接続は逆療法に，そして有機的接続は同種療法に相応しているとも考えられる。

無機的接続と有機的接続の交替によって，現実とファンタージエン国との往来が頻繁に繰り返され，ちょうどN極とS極が交替するのと同じように，そこに振動ないし波動が生ずる。主人公バスチアンは，この振動の中で現実世界における彼の欠点，すなわち虚栄･虚弱･虚無をハーモナイズ（波動調整）するのである。彼がファンタージエン国の中で出会う虚無，そして虚栄に基づく英雄への変身願望や虚偽の望みから生まれる帝王願望は，他でもないホメオパシーにおけるレメディの働きを果たしている。

6．循環を成す生命力

医療における逆療法と同種療法を初めとし，自然界の現象は対立原理に支配されている。ここでは，対立そのものというよりは，その両極の調和的循環が求められている。この関連において，1979年に出版されたこの『はてしない物語』の赤い表表紙と裏表紙の両面には，透かし彫りのように，明暗2匹の蛇が互いにその尻尾をくわえている絵が描かれている。この蛇は「ウロボロス」と呼ばれるが，本来はギリシア語でSchwanzfresser　を意味し，「永遠の象徴であるとともに，自己が無意識のなかに根源的に含まれていることの象徴」であり，具体的には相反する「自己完結」と「自己破壊」を包括し

ている。[20] さらに，万物の象徴としては，「宇宙の統一」を表し，また錬金術においては「原初のカオスと対照をなす整然とした宇宙」を表すと言われる。[21] この意味を考慮に入れると，単にこの本を手にしているバスチアンだけではなく，同じ本を手にする私たち読者もまた，バスチアン同様，はてしない物語の一部を成す立場に置かれるのである。

物語が展開するにつれて，バスチアンの望みは徐々に変化してゆく。彼の望みは，最初彼自身の容姿や性質の欠点を克服してゆく「はてしない自己肯定」の過程でもあった。その後，強く，勇気ある，美しい少年へと変化をとげたところで，他者を交えない，彼自身だけの望みは，満たされるのである。「望み」に関するバスチアンとグラオーグラマーンとのやりとりの中でバスチアンには「真の意志」をもつという指名が課せられる。元帝王たちの都でバスチアンは，自分の願望を実現しながらも，人間界での記憶を失って，人間界へ帰れなくなった人々の哀れな姿を目撃する。彼はそこに，自分がそれまで目指してきた夢の末路を見るのである。そしてようやく，帰る道を探しだすことを決意する。この決意と同時に，バスチアンにとっては，過去の記憶を取り戻すという作業が不可避の課題となるのである。

バスチアンが忘却の過程を経たゆえに，彼の人格変成の過程において肯定的な反転が起こり，彼は，個としての自己の存在の一回性を悟るのである。「愛されたい」という望みに導かれて，バスチアンはアイウォーラおばさまのいる「変わる家」に辿り着く。「変わる家」は，家そのものが変わるだけでなく，家がその中に住む人までをも変えるのである。ここでバスチアンは，「愛されること」から「愛すること」へと方向転換を図る。この方向転換を引き起こす力こそが，バイタルフォースが強化されたことの証左に他ならない。こうして，自分の分身とも言えるアトレーユの必死の努力でバスチアンは，ようようありのままの，一回きりの自分の存在の価値に気づき，あるがままの自

---

[20] 矢内満子「ミヒャエル・エンデ『はてしない物語』をめぐって――そのウロボロス的構造と意味――」，東京教育大学独文研究会『影』第 25 号，1993 年，45 ページ。

[21] 拙論「人格変成能力としてのファンタジー――ミヒャエル・エンデの『はてしない物語』における過去の記憶の再構成について――」九州大学独文学会『九州ドイツ文学』第15号，2001年，3ページ。

分，一回性の自分の存在の価値を認識するのである。

一回性の存在を保持する人間は，肉体と精神から成っている。人間にとって肉体的苦痛の方が直接的で耐え難いように思われるが，しかし，実は精神（心）の方がいっそう傷つきやすいのである。この関連において振動医学を提唱したパウル・シュミットは，「肉体（ボディ）よりも，エネルギーボディのほうが先に病む」(ジモン 72ページ)というテーゼを提出している。このテーゼは，人間の心ないし心的エネルギー，ひいては生命力に照明を当てた精神分析の手法と共通点をもっている。精神分析理論を適用した症例においては往々にして発見される事実であるが，2つの人格，還元すれば，ペルソナとシャドウ，現実世界におけるバスチアンとファンタージエンにおけるバスチアン，ジキル博士とハイド氏といった対立した人格が統合されるとき，ウロボロスのイメージが浮上してくる。そこでは，対立するエネルギー(振動ないし波動)が合流していることが分かる。ウロボロスのイメージは，前述のように精神分析による人格の統合の際にも現れる。

虚栄を張るためにバスチアンは，権力をもつ帝王になろうと欲した。また，虚弱な心を克服しようと，強力な勇者になろうと欲した。最後にバスチアンは，その過ちに気づくのである。これらの経験は，虚栄と虚弱というレメディとしてホメオパシー効果を発揮する。虚栄と虚弱をある程度克服した段階でバスチアンは，彼の冒険における最大の難関である虚無と対決する。虚無は不安と同様，人間の存在を根底から蝕む要因である。現実世界において「ちびで，でぶで，意気地なし」という欠点を持ち合わせていた現存在をバスチアンが認知し，肯定するのに大きな効用をもっていたのが，虚無の化身であるザイーデである。物語の中では，この否定的な人物であるザイーデが，実はレメディとして働き，バスチアンに虚無を克服するだけのバイタルフォースを喚起したのであった。こうしてバスチアンは，ファンタージエン国において，虚無・虚栄・虚弱に対するレメディを摂取し，これらの弱点を克服したと結論付けられる。

今やバスチアンは，人間界における心を閉ざした父親の姿や，彼自身の否

定的な姿にも愛の眼差しを向けるのである。ここには，否定的なものの中にも肯定的側面を見いだそうとするバスチアンの意志が看取される。この意志こそが，特定の振動を含むレメディによって活性化されたバイタルフォースに他ならない。これによって彼は，それ以降現実の世界における様々な困難に対する抵抗力を身に付けることができるのである。なぜならば，今や彼は，宇宙のリズムと共鳴し，そこから無尽蔵とも言えるエネルギーを汲み取ることができるからである。

付記：本研究は，日本学術振興会平成 18 ～ 21 年度科学研究費（研究課題：グリム童話における「文化的変位」に関する研究；課題番号：18520220）の交付を受けて行なった研究成果である。